

西關大學學報

第 七 十 八 號

昭 和 十 五 年 四 月



關 西 大 學 學 報 發 行 局

前今宮職工學校教授囑託
某軍需工場原價計算課長

岸谷梧郎著

× × ×

近刊



四六判上製
本文約二百五十頁
書式約百種
圖解約十種
定價三圓
送料十四錢

陸軍軍需品工場事業場原價計算要綱は、昨年十月省令第五十三號検査令施行規則に依り制定せられた劃期的な統一原價計算制度であつて、其の包藏するところ百ヶ條に及ぶ可成廣汎なるものにして、短時日に手續方法、帳簿書類の様式等之が立案は我が産業界の現狀に鑑み蓋し容易ならざるものがある。

依て著者は今回本要綱の解説を試み、關係者各位の立案に際し参考に資する爲上梓した次第である。而して本書の特色とするところは理論方面は成るべく之を避け、専ら實務的に而も立案に於ける重點は帳簿書類等の書式なるを以て、之等を全部添入し實務上直ちに應用出來得るやう苦心した點である。

【内容大綱】

- 第一章 總 說 制定の目的と適用範圍 統一原價計算制度と要綱の特殊性
- 第二章 原價の構成要素 原價の意義と構成要素 製造原價要素 一般管理費及販賣費の要素
- 第三章 原價計算の方法 總說 個別原價計算 綜合原價計算
- 第四章 工業會計の機構 勘定組織 帳簿書類組織

岸谷梧郎著

原價計算の實際

菊判上製・定價一圓五十錢
二百頁・送料十四錢

發 賣 所

大阪府北區梅田新道

大 同 書 院

大阪府北區梅田新道 電話二七九一三番 電話一五六三番

發 兌 所

大阪府北區會根崎上三

大 名 社 工 業 書 房

大阪府北區會根崎上三 電話一四八四八番 電話二五七五番

新入學生諸君に告ぐ

法學博士長 神戸正雄

目次

新入學生諸君に告ぐ	神戸正雄 (一)
皇國體の眞諦	吉田一枝 (二)
隱岐地名考	田邊信太郎 (七)
春はスポーツ醫學から	江里口春志 (九)
學内報	(一〇)
卒業證書授與式—入學試験施行—人事異動—學業成績優良受賞者	
校友	(一一)
海拉爾支部設立—新京支部—大阪府市千里山同窓會—會員消息	
大陸通信	(一三)
昭和十五年卒業生氏名	(一七)
學生	(二三)
基督教青年會—山岳部—馬術部	
校友會費拂込者氏名	(二三)

茲に多數の同僚を我學園に迎へたることを歡ぶ。私は偶々學園指導の任を荷ふも、唯だ其徳の足らざることは先づ以て之を諸君に御託する。次ぎに諸君が此學園に入りたる以上、其處の學則に遵はれ且つ學生々徒としての本分を守られることを冀ふ。其本分を守るとは、其品格を傷けず専心學業を勵むことに在り。重大なる故障なき限り力めて出席し熱心に課業を受けること、別に職業を有たぬこと(夜間學生)、政治又は社會運動に携はらぬこと、カフエー・バー等へ立寄りざること等々を指す。

學修には固より熱心ならざるべからず。之に就き怠惰は勿論排すべきも過度の勉強も亦採るべからず。記憶は忽にしてはならぬが、思索、應用、創意は尙一層に大切なり。點數席次に拘泥することなきを望む。演習には特に力を用ひられたし。

學修と共に、各自の體力を考へ、適度に適當の運動を爲す心掛肝要なり。過度の運動は慎むべし。交通機關の濫用も避くべく、成るべく徒歩する慣習を作るやうとしたし。教練と集團勤務とは心身鍛鍊の上に有意義のものとして力めて出席するやうにありたし。

或度の娛樂は有つて良いけれども、其種類の選擇には一段と注意ありたし。現下の我國の當面する時局は重大にして又困難なるものあり。諸君は之が認識を過らず、特に諸君としては節約を旨とし物資を大事にせられたきものなり。

次ぎに對人關係では、第一に、諸君は其指導を仰ぐ所の先生を敬ふの態度を失はれないやうにありたい。友人に對しては親切を旨とし、互讓、互助を忘れては

ならぬ。父母と同居を同じくする場合には、親しく其父母に仕へ父母を慰め、父母傍にあらざるときは常に思ひを自分に馳せつゝある父母を偲びて、父母の期待に背かないやうに注意ありたい。此等自分と近い關係に立つ人々への徳義を守るのは勿論、進んでは人としては、博く、全くの他人に對しても、日常機會ある毎に親切を盡し、加之、出来るだけには動物に對しても、木石に對しても愛護の氣持を忘れず、温かい情操を有ちたい。自己の力を誇らず、驕慢の心を起さず、常に謙遜の態度を持するやうにしたい。併し一たび其の爲すべき仕事、勤めに接しては勇往邁進、積極的に努力するやうの態度に出でなければならぬ。

特に諸君のやうに、最高教育を受くる者としては、平々凡々たる庶民たるに甘じてはならぬ。國家に役立ち國家に奉仕し我が日本皇國の爲めに生くる國士又は公僕を以て任じなければならぬ。我國の雄大なる生成に貢獻する高い目標を以て行動しなければならぬ。更に一世の師表ともなり、萬人に範を示し得るに臻ることを期しなければならぬ。かゝる任務を果すには、正義と公益とを尊重し、一身の名利を超越するの修養を要する。自分をして眞に生き甲斐あらしめ、大我に生きるといふのには、小我を生かさぬことの肝要なることがある。諸君は諸君の中に内在する立派なる素質を磨き上げて國家の柱石となつていただきたい。私は諸君が在學中、不斷修養を怠らず、高遠なる理想に燃え、併し驕慢に陥らず謙讓の態度を失はず、至誠至情に充ちたる國士、公僕を以て任じ得るやうになることを冀ふものである。

皇國體の眞諦

教授 吉田 一 枝

一、皇國體の眞諦

國を建てること茲に二千六百年 皇統一系金甌無缺 連綿として古今東西を貫く神皇統治の神國、絶えて無くして單り在り、之れ大日本帝國である。今より二千六百年前と云へば西曆紀元元年を遡ること實に六百六十年、今日世界に覇をなす英米佛獨ソ伊等の諸國は國家としての片影を世界何れの地にも印せなかつたのである。唯だ當時文化を以て隆昌を史上に傳へられたものはバビロン、アッシリア、ローマ、舊埃及、舊希臘、舊印度、舊支那であつたが、今は將た何れの所にか果して能くその國姿を持する。所謂國亡びて徒らに山河あるのみである。

我が國の建國の悠久なることは諸列強のそれとは到底比較にならないものがある。例へば現今歐洲に於て尤も古き王統を誇る英國の王室はハノーヴァー朝になつて(一七一四年ジョージ一世に初まる)から二百二十餘年——その血統を遡つても尙ほ一千年に過ぎない米國は建國(一七七六年獨立宣言)以來百五拾餘年を閱するのみ。プロシヤのホーフェンツォルレルン王室(一七〇一年フリードリッヒ一世即位)は二百拾餘年ことに獨乙聯邦の皇帝となつて(一八七一年)から僅

かに四拾餘年、埃太利のハプスブルグ王室は六百四拾餘年(ルドルフ一世以來)、露西亞のロマノフ王室(一六一三年ハミエル、フェオドロフキチ帝以來)は三百餘年、隣邦滿洲は建國(一六三六年清と稱す)以來二百七拾五年にして亡び列國の治亂興亡民族の盛衰——世界の歴史は恰も走馬燈の如き間に日本は獨り毅然として東海の表に屹立してゐる。斯の如く世界の歴史は疑もなく眞に國家興亡の歴史であり民族盛衰の歴史であるが我が日本の歴史のみは國家興隆の歴史であり日本民族發展の歴史である。

我が日本國體の眞諦、肇國建國精神の根本義——之を一言にして盡せば神皇の統治せられ給ふ神國日本と云ふ民族精神國民の傳統的信仰である。

古來日本國人は我が國を神國と呼稱してゐる。即ち我が國は神明の肇造し給ふた國であり同時に君主、國主、臣民の三者はすべて血族的一體であり血族愛の精神的紐帶によつてその結合は愈々鞏固となり且つ神明の加護し給う國であると信じてゐる。

古來日本國人は神の存在を信じてゐる。神の存在を疑ふものは吾々の祖先の存在を疑ふことである。神は絶対神聖な存在であり至尊至貴、至上至嚴な存在である。故に天祖天照皇大神の御神裔——御直系であらせらるる 天皇を直ちに活ける神——現御神と思惟し崇

敬崇拜し奉ることは寔に自然的なことである。この神國日本の思想と、天皇を現御神と瞻仰し奉る思想とは我が國の國體觀念を明確にする上に於て極めて重要な働きをなすもので且つ祖國尊重の一大源泉となるものである。この國家我の精神、所謂國民精神の磅礴たるところ其所に毅然たる國民文化の華が咲くのである。之を具體的に表現するならば我が國民の國民的自覺の健在するところ其所に神國思想が常に必ずその前提基礎をなしてゐるのである。

神國日本の信仰、天皇現御神の信仰は皇國體の眞諦肇國建國の大精神であるのみならず更に遡つて我が國の開闢の神話が雄辯にこの種の思想を物語つてゐるのである。四五代 聖武天皇の天平五年四月(皇紀一三九三年)遣唐使多治比真人廣成氏の出發に際し、山上憶良氏の餞せし歌に「神代より言傳に來らく麻みつ倭の國は皇神の嚴しき國、言靈の幸はふ國と語り纏ぎ言ひ纏がひけり云々」(萬葉集卷五)とあるのを見ても我が國民の神國體は明らかに開闢以來の傳統的信仰であると云ふことが出来る。天皇は現御神であらせ給ふと云ふ歴史的社會的事實并に日本國民の民族精神信仰所謂 天皇神聖の信仰の表現を立證すべき二三の文獻を擧ぐるならば、例へば 天神御子天降坐す(古事記上卷)、「吾は日神の御子」(古事記中卷)、「天神の御子天降りましぬ」(古事記中卷)、「神倭伊波禮毘古天皇」(古事記中卷)、「神日本熊余彥火火出見天皇」(日本書紀神代上)、「始馭天下之天皇」(日本書紀神代下)、「天孫子來ます」(日本書紀三)、「我は是れ日武紀」(天孫子來ます)、「日本書紀三」、「明神ノ御宇日本天皇詔旨」(日本書紀孝德紀二五、同天武紀二九)、

「明神御宇日本、天皇詔旨、始我の遠皇祖之世……」(日本書紀孝德紀二五)、「明神御宇日本、按根子、天皇」(日本書紀孝德紀二五)、「現爲明神御、八島國」(日本書紀孝德紀二五)、「掛麻久毛畏岐明御神止大八島國所知食須天皇」(出雲國造賀詞)、「明神御宇天皇詔旨、令義解」(王(は)神に(ま)せば)「萬葉集卷二、皇(は)神に(ま)せば」(萬葉集卷三)、「明つ神わが皇」(萬葉集卷六)、「現御神、大八島國所知、天皇」(續日本書紀二)、「明神、大八島國、知、倭根子天皇」(續日本書紀二)、「等々」

二、華國建國の大精神

「大日本は神國なり、天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみ此の書有り、異朝には其類なし。此の故に神國といふなり。」(神皇正統記)、「蓋し一人の道を知るには先づその父母先祖を知り、國體を辨へずばあるべからず。その國體を知るにはその太元開闢の由縁を知らずばあるべからず。」(古道大意)。

「此の豐葦原水國は汝知らざる國なりと言依さし賜ふ。」(古事記上卷)。

「葦原千五百秋之瑞、國是吾子孫可王之地也、宜爾皇孫就而治焉、行矣、寶祚之隆、當與天壤無窮者矣。」(日本書紀二)、「この天壤無窮の神勅は形は多少異なるも、古語拾遺にも、舊事紀にも載つてゐる。神勅は申す迄もなく、天祖が皇孫に對しこの國土の上に皇道政治を無窮に涉つて執り行ふべきことを宣明し給ふたものである。而してこの血統主義德治主義の御指示及寶祚無窮の大宣言大豫言は能く當時の日本國人の意識の反映せしものと解すべく、然も亦その事有

りしが故に神勅は千古を貫く我が國民の確信信仰となつて無窮に傳承せられてゐるのである。

「於是其の遠般斯八尺勾魂、鏡及草那藝鏡……を副へ賜ひて詔りたまへらくは、「此の鏡は專ら我が御魂と爲て吾が前を拜くが如伊都岐奉れ……」(古事記上卷)。

天照大神及賜、天津彦火瓊杵尊、八坂瓊曲玉及八咫鏡、草薙劍三寶、寶物、及天照大神、持、寶鏡、授、天忍穗耳尊、而祝之曰、「吾兒、視、此、寶鏡、當、神、猶、視、吾、可、與、同、床、共、殿、以、爲、齊、鏡。」(日本書紀二)。

是れ天照皇大神の神器御親授の神勅で、これより三種の神器に永く皇位の御しるしとして御歴代の天皇が代々御傳承し給ふこととなつたのである。

「高皇產靈尊因、勅曰、「吾、則、樹、天津神籬、及天津靈境、吾、爲、吾孫、奉、亦、矣、汝、天兒、屋命、太玉命、宜、持、天津神籬、降、於葦原中國、亦爲、吾孫、奉、齊焉。」(日本書紀二)。

是れ高皇產靈尊の神勅で神人合一祭政一致の本義を垂示せられ建國に際し大政轉嬗の臣僚翼贊の道を誨へさせ給ふたものである。

「爾に天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命、并せて五伴緒を支り加へて、天降りまさしめたまひき。於是其の遠般斯八尺勾魂、鏡及草那藝鏡亦當世思金神、手力男神、天行門別神を副へ賜ひて詔りたまへらくは、「此の鏡は……次に思金神は前、の事を取り持ちて政爲よ」とのたまひき」(古事記上卷)。

「以て中臣、上祖天兒屋命、忌部、上祖太玉命、媛女、上祖天鈿女命、鏡作、上祖石凝姥命、玉作、上祖玉屋

命、凡五部、神、使、配侍、焉。」(日本書紀二)。

「復た、勅、天兒屋命、太玉命、推、爾、神亦同侍、殿、內、善、爲、防、護。」(日本書紀二)。

是れ大祖が大政轉嬗の臣僚の御選任につき深甚なる御軫念あらせられ給ふたのである。

「又、勅、曰、「以、吾高天原、所、御齊庭之、德、亦當、御於吾兒。」(日本書紀二)。

是れ大祖が我が國民の正良品米穀につき深き御神慮御垂示あらせられ給ふたのである。

以上に列示したる御神勅は、我が華國の大精神國體の淵源・眞髓・根本義所謂華國の大憲法であつて皇統の無窮と君臣の分の不動とは既に遠くこの時に確定したのである。

斯くて、皇孫瓊杵尊より鷗鷺草葺不合尊に到る迄は日向に在りましたが神日本磐余彥天皇に及び天業恢弘・皇國創建の思召高く、遙かに皇軍を東遷せしめ給ひ、大和の橿原に都を築め御即位式を擧げさせ給ふ。是歳を以て我國の紀元元年となす。

神武天皇御東遷の詔に

「蒙以、義、正、治、此、西、偏、皇祖皇考、乃、神、乃、聖、積、慶、重、暉、多、歷、年、所、而、遠、貌、之、地、猶、未、盡、於、主、澤、遂、使、邑、有、君、村、有、長、各、自、分、踴、用、相、後、驟、……余、謂、彼、地、必、當、足、以、恢、弘、天、業、光、宅、天下、蓋、六、合、之、中、心、乎。」(日本書紀三)。

橿原宮都の詔に

「自、我、東、征、於、茲、六、年、矣、……而、中、洲、之、地、無、復、風、塵、誠、宜、恢、廓、皇、都、規、葦、大、壯、……」

夫、大人ノ立ツ制ヲ義必ズ隨ヒ時ノ苟キ有レリ民ニ
何ッ妨テ聖造ク且ツ當ニ披拂シ山林ノ經ニ當テ宮室ヲ
而泰ニ臨ニ寶位ニ以テ鎮ニ元元ニ上ハ則テ答ニ乾靈
授テ國ノ之德ニ下ハ則テ弘ニ皇孫養テ正ノ之心ヲ然
後兼ニ六合ヲ以テ開ニ都ヲ掩ニテ入統ニ而爲レト宇ト不ニ
亦可ナラフ。觀ニ夫ノ敵傍山ノ東南極原ノ地ノ者蓋シ
國ノ之垣區ナラフ乎。可レト治ヒ之、是月即テ命ニ有司ニ經ニ
始ニ於極原ノ宮ニ……辛酉年春正月庚辰朔、天皇即ニテ
位ニ於極原ノ宮ニ」(日本書紀三)。

吾人は天地を兼ねて世界を家となす雄渾正大宏闊な
る皇國の創建・創業の大精神を瞻仰し得るのである。
而してこの雄宏なる建國の大詔は、天祖の神勅と同様
に能く當時の日本人の意識の反映せるものと解すべ
く、然も亦その事有りしが故に建國の大詔は千古を貫
く我が國民の確信信仰となつて悠久に傳承せられてゐ
るのである。

神武天皇は御即位の後、鳥見山の靈囑を立て以て
皇祖天神を祭らせ給ひ、報本反始祭政一致の精神を垂
示せさせ給ふ、歷朝の大嘗祭と同一精神である。

詔に曰く
「我皇祖之靈也、自天降鑒、光助、朕躬、
今諸、虜、已平、海内無事、可、以、郊、祀、天
神、中、大孝、者也」(日本書紀三)。

世界に國は多いが我が天祖の神勅及神武天皇建國
の大詔の如く、東西を串し萬世を貫く不動不易普遍妥
當の大豫言大宣言あることなきものである。即ちこゝ
に我が皇國の基礎全く成り、四海みな皇化に浴せざる
ものなく、皇統連綿・萬世一系・神皇統治の金甌無缺

の神國日本の皇國體を、自然發生的に愈々鞏固に形づ
くつて今日に及び未來盡の無窮に到るのである。
御歴代の天皇はみな天祖の神勅神德、神武天皇
建國の大詔を奉體し濟世治民、能くその範を垂示せさ
せ給ふ。

三、肇國と建國

我國の肇國並に建國の淵源に關する神話傳説は、諸
外國の建國史のそれと著しい特色を有し、或る一定の
時期を劃することなく無始無限無涯の古に遡り天地開
闢の傳説と連結せられ、所謂「國ヲ肇ムルコト宏遠」
悠久に、隨て國體も天地開闢と共に確定せられたも
のである。我國の古典たる古事記、日本書紀の二典は
共にその初に開闢の傳説時代の諸神の名を列挙してゐ
る。即ち古事記(上卷)に於ては別天つ神五柱、神世七
代の神十二柱の諸神の名を挙げ、日本書紀(一)に於
ては神世七代の神十一柱の諸神の名を挙げてゐる。茲
に神世七代と云ふは天神七代の義にして地神五代以前
に我國を肇造せられ給ひたる神々を申す。地神五代と
は天照大神より鸕鷀草葺不合尊に到る五神にして即
ち神武天皇以前——神代に於て我國を肇造せられ給へ
る神々を申す。而して天神七代地神五代をすべて神代
と申し、神武天皇より人皇の御代と申す。

古事記(上卷)開卷第一頁に「國雅如ニニ浮脂、
而久羅下那洲多陀用弊流之時」とあり。日本書紀(一)
神代上冒頭に「古天地未剖、陰陽不、分、渾沌、
如雞子、……故天先成而地後定、……然後神聖
生、其、中、一焉。故曰開闢之初。洲壤浮、漂、

猶、游魚之浮、水上也」とある。故に神代の我祖國
は所謂文字通りの豐原の瑞穂の國なりしものなり。
而して諸神の御名は古事記によれば天之御中主神に始
まり、日本書紀によれば國常立尊に始まり二典共に伊
非諾尊伊非冉尊に至つてゐる。是を神世七代と謂ふ。
古傳承によれば伊非諾伊非冉の二神は現人神なりとし
て傳へられ、之の二神以前の諸神は唯だその御神格の
顯現を認識したるに止まるものと傳へられてゐるので
ある。次に

古事記(上卷)には「於是天ツ神、命、以、詔、
伊邪那岐命伊邪那美命二柱神、修、理、固、成、是、多、陀、用、
弊、流、國、賜、天、沼、才、而、言、依、賜、故、二、柱、神、立、天、
浮、橋、而、指、下、其、沼、才、以、畫、者」とあり。日本書
紀(一、神代上)には「伊非諾尊、伊非冉尊、立、於、
天、浮、橋、之、上、共、計、曰、底、下、豈、無、國、歟、
迺、以、天、瓊、矛、指、下、而、探、之、云々。又日本書
紀一書(一、神代上)曰、天神謂、伊非諾、尊、伊非
冉、尊、曰、有、豐、葦、原、千、百、秋、瑞、穗、之、地、宜、汝、往、
修、之、迺、賜、天、瓊、戈、於、是、神、立、於、天、上、浮、
橋、投、戈、求、地、云々。又古語拾遺に曰く「一
聞、夫、開闢之初、伊非諾伊非冉、二神、共、爲、夫、
婦、生、大八洲國及山川草木、次、生、日、神、月、神、
最後、生、素戔嗚尊、云々。即ち古事記、日本書紀、古
語拾遺の記事は何れもみな天地開闢の傳説より直に伊
非諾伊非冉尊の肇國の傳説に連結せるもので、別言す
れば國家又は民族に關することは諸冉二神の御時より
始まるものとも觀るべきである。
日本書紀(一、神代上)に「伊非諾尊伊非冉尊共、

識曰「吾已」生三子大八洲國及山川草木、何不生三天下之主者一歟、於是共生三神、號大日靈貴、此子光華明彩、照徹於六合之内云々。

古事記(上卷)に「此時伊弉冉尊大歡喜、詔吾者生三生子、而於生終、得三貴子、即其御頸珠之玉緒母由良邇取由良迦志而賜之天照大神、而詔汝命者所、知高天原、矣事依而賜也」云々。

日本書紀(一、神代上)一書に曰く「伊弉諾尊勅任三子、曰天照大神者可、以御高天原也」云々即ち

肇國の代表的御神にして民族信仰の中樞にましまし給ふ天照皇大神は、伊弉諾伊弉冉尊が高天原の統治者として生み給へる御神であらせらる。

古事記(上卷)に「爾高御產巢日神、天照大神之命以於天安河之河原、神集八百萬神、集而思念、神令思而、詔此葦原中國者、我御子之所知國、言依所賜之國也」。

日本書紀(二、神代下)に「皇祖高皇產靈尊特鍾、以崇養焉、遂立皇孫天津彦火々瓊杵尊、以為葦原中國、主也」。

日本書紀(一、神代下)一書に曰く「天照大神勅天、推彦一曰、豐葦原中國、是吾見可、王之也也」。

日本書紀(三)に「昔我天神高皇產靈尊大日靈尊、此此葦原、瑞穗、國、而授我、我天祖彥火瓊々杵尊」。

日本書紀(二、神代下)一書に天壤無窮の神勅を掲記す、曰く「天照大神乃賜天津彦々火瓊々杵尊、八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種、寶物、又以中臣、

上祖天、兒屋命、忌部、上祖太玉命、猿女、上祖天、御女命、鏡作、上祖石凝姥命、玉作、上祖玉屋命、凡五部、神使配侍焉、因勅皇孫曰、葦原、千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可、王之也也、宜爾皇孫就而治焉行矣、寶祚之隆、當與天壤無窮者矣」(前掲)。

古事記(上卷)に「天照大神之命以、豐葦原之千秋長五百秋之水穗國、我御子正勝吾勝勝連日天忍穗耳命之所知國、言因賜而天降也」。

古事記(上卷)に「故爾詔天津日子番能邇々藥命而離天之石位、押分天之八重多那雲、而、伊都能知和岐、知和岐耳、於天浮橋、宇岐土摩理、蘇理多多斯耳、天降坐于笠繁、日向之高千穗之久土布流多氣」。

民族尊崇の中心たる天孫が主權者として萬世に君臨せられ給ふのは、天祖の神勅によつて確定してゐるのである。別言すれば我國家の元首の御地位は斯の如く神意によつて決定せられ給ひたるもので御歴代の天皇が現御神として天日繼の高御座に坐すことは、天祖の神意の御繼承であり隨神の道である。實に我が肇國の具現化は天孫の御降臨の御時にあるものと拜察すべく然も肇國が今より何千年何萬年の以前であるかに就ては實證的には人智を以て到底企圖し得ざる程それほど我が肇國は宏遠、樹徳は深厚であらせらる。日本書紀(二)に、「自天祖、降跡、以逮、于今(神武天皇)一百七十九萬二千四百七十餘歲」とある如く、我々の祖先の包懷せる精神思想の雄渾深遠さに感嘆し襟を正さざるを得ないのである。

我が古典は我が日本民族が「天之石位を離れ天之八重多那雲を押し分け」(古事記、上)「天關を闢き雲路を披け」(日本書紀、三)高天原より此の國土に天降れることを記述してゐる。これは吾等の祖先がその發祥の地を忘失せることを示すもので高平原の所在は人類學、人種學、考古學、比較解剖學、地史學、土俗學、生物學、地理學、地質學、社會學、神話學、傳説史學等の問題に屬し今日未だ定説あるを聞かない。

斯の如く吾等の祖先の發祥地を忘れ去りしことは全く有史以前の神代悠遠の太古に屬することを立證するものである。神話傳説によれば日本民族の故郷を高平原と稱し日本民族を天孫の種族なりと信じてゐる。

要するに日本民族の祖先は、天照大神を始め奉り八百萬の神々の御住居になられてをつた神座所謂高平原より之の國土に遷徙移住したるものなるべし。而してその移動渡來は少くとも二回の大移住を試んだ様である。その第一次の移住は出雲地方を中心とし、その地方に國家を經營せる所謂出雲族である。古史に素戔嗚尊を出雲族の首長なりと謂ふ。出雲帝國の出現之である。その第二次の移住は、天照大神の御嫡流なりとの理由により出雲族をして之の國土の支配權を譲らしめたと云ふ所謂天孫族の日向移住これなり。古史には天孫の御嫡孫瓊々杵尊及其御一族の日向御降臨を傳ふ。之の天孫族は後に出雲族と結合し先住の諸種族を歸順融合同化し日向に於てその地方を統治せらるること三代にして神武天皇は東遷して大和を中心として大和帝國を建設せらる。日本書紀(三)によれば之の時は「辛酉年、春正月庚辰、朔」なり。推古天皇の御時支那よ

り傳來し當時の攝政聖德太子之を用ひて我國の紀元を定めさせ給ふ。推古天皇の九年を辛酉の年と定められ、それより一二六〇年を遡算しその辛酉の年を神武天皇即位の年とせられ而して我が皇紀元年は西曆紀元元年より遡ること實に六百六十年に當る。

天孫族と先住族たるつちぐも(土蜘蛛)族(くず、岡栖、國策、あいに、えぞ、えみし、蝦夷)族、はやと(華人)族(くまぞ、熊襲)との交渉は主として戰爭征服の歴史の如きも天孫族と出雲族とは天孫族が大和帝國建設以前に既に之等種族の融合同化に努めた形跡がある。而して古代に於ては支那朝鮮より歸化し文化的には相當優秀なる人々も存在し、之等の異種族が大和民族に包含融合同化し區別し難き一體となり、大和民族を中心としその下に統制支配せられ、茲に日本民族は諸種族の混血より構成せられた一種獨特の民族として國家生活を營めるものである。故に我が國家は征服國家にあらずして融合同化の一大家族國家である。

世界何れの民族もその原始時代に於ては天を偉大なるもの之至限として崇敬崇拜したものであるが日本人は自らが高天原より降れる天孫の子孫なりと云ふ國民的自覺、信仰、信念、確信をその基調とせるもので天上の文化を地上に布くと云ふ自覺が自ら國民の間に磅礴として漲つてをつたものと考察せられ得るのである。次に天孫の御降臨に際し天孫を中心と仰ぐ(イフコト)神を始め諸神の天降り、是は天孫の輔翼者は一人又は二人の一部階級者にあらずして皇道政治は萬民の翼賛によるべきものなることを意味し別言すれば我が堅固精神の一は我が國家は社會各層の渾然融合一體化の共存共榮の協同態にあるべきものなることを御指示遊

ばさせ給ひたるものと拜察すべきである。

天祖の神勅によりて御指示せられた如く皇統は天地開闢以來天祖の御直系萬世一系の天皇であらせられ給ふことである。例へば續日本紀によれば「高天ノ原ニ事始メテ遠天皇祖ノ御世御世中今ニ至ルマデニ天皇ガ御子ノアレ坐サム彌野ギ繼ギニ」(文武天皇御即位ノ宣命、續日本紀一)、「高天原ヨリ天降り坐シシ天皇ガ御世ヲ始メテ中今ニ至ルマデニ」(元明天皇改元ノ宣命、續日本紀四)と仰せらる。三浦梅園氏の「無始の帝統」(贅語)なるもの之である。

教育勅語に「我が皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニこと拜するが所謂聖國の皇祖皇宗の御解釋につき異説なきにあらざるも皇祖と申せば天照皇大神を始め奉り神代之諸神を意味し奉り、皇宗は神武天皇を始め奉りその後の御歴代の天皇を意味し奉るべきものと拜察す。皇統は萬世一系萬古不易隨て國體は天地開闢聖國と共に定まる。例へば日本書紀によれば「天地開闢君臣始

ヨリ有リ」(日本書紀二四、皇極紀四年)、「開闢已來法令尙シ君臣位ヲ定メテ運屬スル所アリ」(續日本紀八)、「我が國家開闢以來君臣定マレリ」(續日本紀三〇)、「天地の初の時ゆつそみの八十伴男は大王にまつるふものと定まれる」(萬葉集一九)とある。即ち我が國體は天地開闢聖國と共に定まると云ふことは或る一定の時期に人為的作爲的に立てられたものではなく悠遠の昔より自然發生的に生成確立したものであることを意味するものである。

疊に一言せる如く天孫御降臨に先だち既に之の國土に先住せる諸種族は所々に散在せるに止まり、鞏固なる國體を結成し國家を構成せらるものにあらざること云

ふ迄もなきことである。唯だ大國主命は出雲に於り饒速日命は大和に在り所謂一局地に割據し幾何かの地を開き民を率ゐる農事を勸めたるものにすぎず。時に磐余彥尊(神武天皇)皇太子として諸兄及諸皇子等と共に日向高千穂宮にあらせられ群臣を率ゐる東遷せらる。是哉甲寅(紀元前八年)十月皇備東遷の途につかせられ豊前前野の宇佐、筑紫の岡田、安藝の埃宮、吉備の高島を経て浪華に出でさせ、途を轉じて紀伊の熊野の險を越えて吉野に入らせられ大和を平定させ給ふ。

是に於て辛酉の年春正月庚辰の朔、明治六年太陽曆を採用することになり換算して二月十一日と定む。之が紀元節である。敵傍山の東南檜原の地を相し都を定めて天穗子命、天富命、道臣命、大久米命、可美眞手命等の功臣を率ゐて即位の大禮を挙げさせ給ふ。

建國茲に成り神武天皇を建國の神と申し神武天皇の即位元年を建國(皇紀)元年と云ふ。吾人は天地を兼ねて世界を家となす雄渾正大宏遠なる皇國の創建創業の大精神を仰ぎ得るのである。而して世界列國中皇祖紀元を有するものは獨り我が大日本帝國あるのみである。

抑々神武天皇即位紀元以來今日に到り迄年を経ること二千六百年、此間治亂盛衰なきにあらざりしと雖も終始一貫して渝らざるものは我が國體である。即ち我が日本國は萬世一系の天皇に依りて統治せられ古來皇室に姓氏なきことは殆んど比類なきことと云ふべく茲に我が國體の特異性が存在するのである。蓋し皇室、天皇及皇族に御名のみあらせられ氏も姓もあらせられ給はざるは至尊至貴にして他に類似のものなく隨つて氏姓によつて他と區別する必要なきによる。

隱岐地名考

講師 田邊信太郎

隱岐 といふ國名は記紀兩書の國土創成傳説の冒頭にすでに現れてゐるが、その地名としての解釋は、出雲地方からみて海上遠くにあるがゆゑに、沖の意味であると説明するのが通説である。しかしこの通説に對して松岡静雄氏の異説がある。その異説によれば沖にある島の場合には、オキッシマと稱へるのが通則であつて、たゞオキまたはオキシマとはいはれない。このことは宗像のオキッシマ・オキツカヒベラノ神・オキッ城などの實例によつても知られる。松岡氏はさらにその論據について積極的な説明を下して、キ族なる一部落のみたことを推定してゐる。そのキ族のみたことを推論する論據は、出雲風土記編纂員であつた置部臣と正倉院計會帖記載の日置臣とを同一人とみて、オキとヒキとは相通じて慣用せられ、オとヒとはキ族の美稱にすぎないといふ考への仕方である。したがつて隱岐はこのキ族の古據せることによつて、與へられた地名であると解釋する。しかしこの解釋の仕方は日置臣と置部臣とを、同一人とみる假定に基いてゐるが、その根據は確定的なものとは考へ得られない。もしこの假定をさらに論定するためには、近江の息長(オキナガ)壹岐・安藝などのキについても、かならず批判考證がなくてはならない。

記紀 はまた隱岐を「三子洲」として記載してゐて

一般的にはミツゴノシマと訓まれてゐる。このミツゴノシマの意味について、吉田東伍博士はミツを美稱として理解し、満々しく見ゆる子供の意味であると説明してゐる。もとよりこの場合子供とは本土を大きい親の姿にみたて、これに對する小さい子供の島といふ意味にはかならない。しかし記紀は「三子洲」の直後にフタゴジマを記載してゐるゆゑ、その前後の叙述の仕方からすれば、むしろミツは數量の三として理解するのが妥當である。したがつてミツゴノシマは三個の小島として解釋すべきである。日本書記通議も「三子洲は三島鼎立の義か」と述べて三島鼎立説をたてゝはゐるが、この三島鼎立説もそれを是認するがためには一假定を設けねばならない。それは現在の隱岐が島後の一個の島と、島前の三個の島とからなりたつてゐるからである。そのため島前の三個の島をミツゴノシマにあてるとすれば、島後はそれから除外されることになる。また島前に島後をもあはせて、ミツゴノシマと稱へられたものとみれば、ミツといふ數量的な意味と一致しない。

この問題についての一見解は、島後を親島とみてその親島が島前の三個の小島を率ゆるゆゑに、ミツゴノシマと呼稱があたへられたとする説明の仕方である。しかしこの解釋の仕方によつても、親島たる島後

が除外されてゐるとともに、フタゴジマの場合にしても、親島としてみだてられてゐる島は本土であるゆゑこの説明の仕方妥當とは考へられない。こゝにおいて一假定が必要になる。元來島前の三個の島が鼎立して形成してゐる内海は、噴火口であつて、その三個の島は噴火口の外壁の隆起地帯であることは、地理學者の定説である。したがつて現在の三個の島は噴火口の外壁が沈降して、その隆起地帯の水面上にのこされた部分である。この地理學上の定説にもとづいて、古代における赤灘瀬戸はなほ陸續きであり、海峽を形成してゐなかつたのではないかとの疑ひがかげられ得る。

今日にあつても知夫島と、西ノ島との間の赤灘瀬戸は、きはめて幅が狭くかつ水深も浅い。それゆゑたとへ文獻上の資料はみだしえないといへ、このことからして古代における陸續きの地峽が、地震または沈降作用の結果として、地形上に變動がひきおこり、現状の狭い海峽に變化したものと假定しても、かならずしも索強な考への仕方ではないであらう。もしこの假定が是認せらるゝならば、島前は三個の島からなりたつてゐたことになるゆゑ、三島鼎立説は確定的な論據

高段圖書門



二十段家書

大正市波瀾堂印書局
電話四七三

をえられることになる。しかしたゞそのためには地形變動についての科學的な確認が必要である。

島前の三個の島には知夫島、西ノ島、中ノ島なる島名があたへられてゐる。知夫は現在チブともチブリとも稱へられてゐるが、和名抄は知夫郡（チブリノコホリ）として記載してゐるゆゑ、チブリが古い地名である。知夫島は出雲地方すなはち地方（デカタ）からは、もつとも近い距離に位置せる島であり、したがつて地方から隠岐各地への海上航行にあつては、この知夫にまづ停泊するのが便宜である。そのため古くから隠岐航海の門戸にあたり、その重要な寄航地であつたこの隠岐渡海の最初の重要な寄航地であつたといふことを契機として、知夫なる地名が道觸（チブリ）の神を祈つてゐたことによつて、與へられたとの推論がひきだしえられる。

元來 道觸の神は道路の安全を祈る神である。その道路を來往するにあつて、その神に手向けすること、古來行はれてゐた信仰であつた。土佐日記にはつぎの和歌がみだしえられる。

わたつみのちぶりの神に手向けする
幣の追風止まず吹かなむ

すなはちこの場合道觸の神は、航海の安全を祈願する神とみて失當ではない。それゆゑ出雲地方から出帆した古代の船舶は、この島に祀られた道觸の神に祈願したのち、さらに附近の島へ航海したものと考へて支障はない。言葉を換へて言へば、

隠岐 各島へ航海する基地が知夫にあることであ

る。したがつて知夫島の位置を基準として、西方に在る島に西ノ島なる方位による島名が與へられ、その島の中間に在るがゆゑに、中ノ島なる地名がありえらる。かく解釋することによつてはじめて、西ノ島と中ノ島なる島名があるにかゝはらず、東ノ島なる島名の存在しえない理由が理解しえられるであらう。

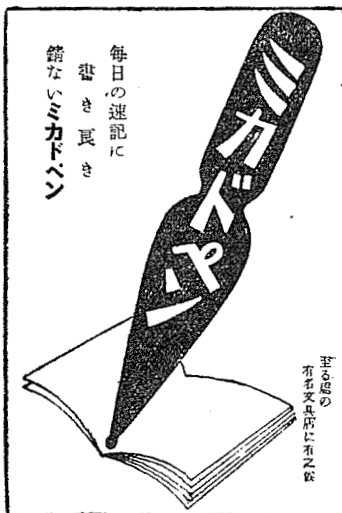
つぎに島前・島後なる地名は、現在ドウゼン・ドウゴと濁音で訓んでゐて、清音では決して訓まない。この濁音は地方的訛言として考へられないでもない。しかし出雲地方を基準として、その島の位置の仕方をみれば、前ノ島・後の島であるべきであつて、島の前・島の後ではほとんど意味を理解しえない。それゆゑドウゼン・ドウゴは道前・道後であると解釋し、その道といふ古代の意味が忘れられた結果、地形的にみて島であるがために、類音の島といふ漢字を置きかえたものとして、理解するのが妥當である。古代の一般的な實例によれば、國を區劃する場合道前（ミチノクチ）道後（ミチノシリ）によつて區別してゐる。

國造 本紀の三野前國造はミノノクチノミチノクチ三野後國造はミノノクチノミチノシリと訓む。

道尻岐閉國造はミチノシリノキヘである。越前はコシノミチノクチ、備前は吉備道前の省略であつて、キビノミチノクチである。伊豫の道後もミチノシリと訓まれてゐたのが、そのままドウゴといふ地名として現存する實例である。隠岐のドウゼン・ドウゴもかく隠岐の國の區劃として、道前・道後の道が島におきかへられながらも、その訓みはもとのまゝ傳へられたものと

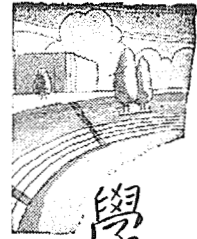
して解釋すべきであらう。

かく島前・島後の島は道の類音上の置換であることは、文獻的には古くさかのぼりえないとしても、寛文十八年および寶徳四年の古文書に「道前海土郡」と記載してゐることによつて、その論定の一資料を提供し得るであらう。もとよりこの場合のミチノシリノミチノクチは、必ずしも往還の通路のみを指稱してゐるものとして、狹義に解釋すべきでないことは論をまたない。クチとシリとの區別は京都を基準として、行程距離の遠近を指示してゐるとともに、ミチにはある地方または國の意味が與へられてゐる。東海道・中山道などの道は、その往還の街道のほか、なほその街道を中心としたその地方一帯をも意味してゐる。ドウゼン・ドウゴの地名もかゝる考への仕方によつて、解釋するのが妥當と考へる。



毎日の速記に
書き更き
速ないミカドペン

筆の速記
速記の筆



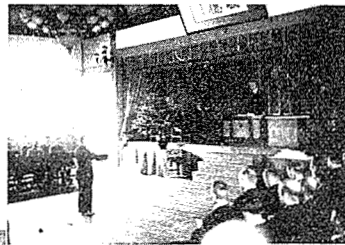
學内報

卒業證書授與式

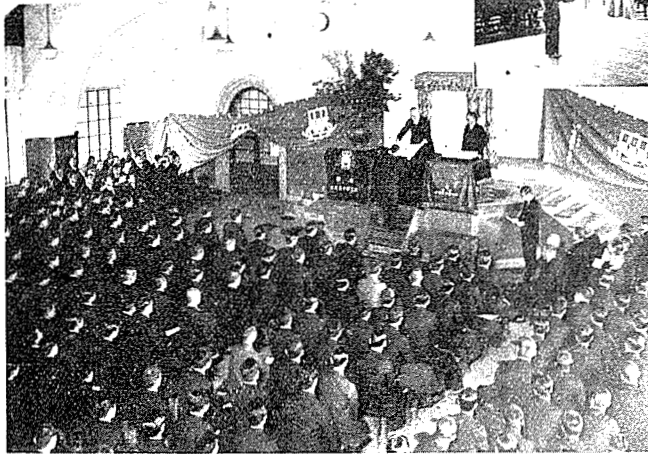
本學卒業式は三月十九日、學部第十六回
は午後二時より千里山學會威徳館に於て、
また専門部第一部第八回、同第二部第五十
二回卒業式は、同午日前十時より天六學舎
講堂に於て舉行された。國歌合唱、證書授
與について神戸學長の式辭、尙専門部にあ
りては正井部長の告辭あり、文部大臣、大
阪府知事、大阪市長、校友會總代古川武氏
學士會代表角田好太郎氏の祝辭ありて、卒
業生總代の答辭あり、學歌を齊唱し、嚴肅
裡に閉會した。

學長式辭

茲に學部第十六回、専門部第一部第八回
専門部第二部第五十二回卒業式並に豫科修
了式を舉行するに當り一言式辭を述べたい
と存じます。先づ以て來賓各位には御多忙
の處御繰合せ御來臨下さいました事は私共
本學關係者の誠に感謝致すところでありま
す。本日卒業の榮を擔はれたるものは法文
學部法律學科百五十二名、政治學科七名、
經商學部經濟學科四十四名、商業學科四十



卒業證書授與式
學部第一(上)
學部第二(下)



五名、専門部第一部法律學科二十九名、經濟學科二十
五名、商業學科百四十七名、専門部第二部法律學科二
百七十二名、經濟學科七十四名、商業學科百七十七名
國語漢文學專攻科九名、英語專攻科二十七名、合計一
千八名並に豫科修了者第一豫科二十六名、第二豫科二
百九名に上ります。斯く多數の卒業
生を社會に送ることになりましたが
未だ世間馴れのしない純真なもので
ありますから、來臨各位、先置各位
の御指導御支援をお願ひする次第で

あります。

父兄各位に一言申し上げます、各位には子弟方のこと
につき長い間には御苦辛御苦勞の多かつた事と存じま
すが、今は最高の學府を卒業し、又は専門の學科を卒
業されるについては、嚙御満足のこととお慶び申し上げま
す。私共は常に設備萬端につきいろいろ苦慮致してあ
りますが、不十分な點があつたであらうと寔に恐縮に存
じます、御氣付の點はよろしく御注意をお願ひ致しま
す。

教職員各位にも一言申し上げます、斯く多數の卒業生
を社會に送ることを得ましたことは教職員各位の御苦
勞の賜であります。各位は常に仕事を天職と心得て熱
心に訓育に従はれて居られますことに對し重ねて謝意
を表する次第であります。

卒業生並に修了生諸君に一言申し上げます。修了生は
殆どすべて學部に進まれると存じますし、本學の方針
は承知せられて居られる筈でありますから、又入學式
に申し上げることとして、今は只修了のお喜びを
申し上げるに止めます。

卒業生諸君とは永い間學園生活を共にし、誠に名殘
惜しく存ずる次第であります。こゝに紀元二千六百
年の芽出度き記念すべき年に卒業されますことは特別
なる光榮として記念さるべきものと存じます。社會は
益々人材を求めてやまぬ、この時社會に出てで活躍さ
れる事は前途誠に洋々たるものあり、衷心お喜びが申上
げる次第であります。

私がかねて各位に機會ある毎に述べて居りますので
事新しくありませんが、處世上についての御注意を
申し上げて送辭と致します。諸君の中には進んで學問

を究めるものもありませうが、大多数は實社會に活躍される事と思ひます。御参考までに自分の信念を申し上げます。自分は永い人生の體驗に於て、自分の興へられた仕事に懸命に没入すると云ふ事が最も大事なことであり、又愉快なものと信じます。地位の高い低いなどを氣にとめず仕事に没入し、分量に於ても、品質に於ても人以上に働いて、抜んで、邁進すれば必ず成功する。そして吾々は人生を樂しむ事ができる。待遇などをとやかく云つてゐては成功は覺束ない、この意氣込で積極的に勇敢に突進して貰ひたい。

も一つ突進する上には智慧がなければならぬ、學問をやつたから相當根本原理は判つたらうが、それは學問の片鱗である、それを基として推理し、一を開いて百を知る叡智が必要である。又學校に於て學んだ處は學問の一端で、學問の領域には卒業と云ふものがない學問に關する限り一生を通じて學問の入口を覗いたと云ふ覺悟で勉強し、書物を離さないと云ふことが望ましい。

又學問をやつたものは理窟や形式を重んずる傾向があるが世の中は理窟通り行くものでなく微妙なものであるから人情の機微を察するの明と常識を養ふ事が大切で、これを巧みに應用して世の中に活動して貰ひたい。そして仕事をする上には以上だけではまだ十分ではない。すべての行爲は道德的な背景をもち道德的な信念を養ふと云ふ事が肝要である。人間として社會に生活するには道德を重んじ、公益を尊重し、正義を守つて貰ひたい。社會には公益並に正義に反する行爲を

見出すが、世間の風潮に従はず敢然として守り、神の前に出て恥かしからぬ様にせねばならぬ。

人が智慧を活用し、道德を守つて行つたならば必ず成功するであらうが、慢心をおこし傲慢になり易い。これは慎むべきである。成功すると云ふ事は自分の力ではない。先輩、後輩、社會、國家の力、大自然、神の力なりと云ふ事を忘れてはならぬ。これが成功の基と思ふ。

終に健康に注意して下さい。成功しても體が弱くは何にもならぬ。規律ある生活をして暴飲暴食を避け體を大切にして下さい。諸君の體は自分の體ではない、み國の尊い體である。そして本學の名譽を一段と高揚されんことを冀望致しまして本日の式辭と致します。(文書記者)

入學試験施行

本學各部入學試験は左の通り施行した。

大 學 部	四月一日	千里山學舎
大 學 豫 科	四月四、五日	千里山學舎
專 門 部 第 一 部	四月二、三日	天六學舎
專 門 部 第 二 部	四月七日	天六學舎
高入學志願者數及び入學許可者數は左の通りである		
法文學部	志願者數	入學許可者
經商學部	一五二	一三一
大學豫科	一七五	一四一
專門部第一部	八一七	三二五
專門部第二部	六九三	三九四
專門部第二部	二、一七七	一、二三五

人事異動

四月一日付

任法文學部長	教授	安藤 光
任經商學部長	教授	賀來 俊
任期満了ニツキ 免法文學部長	教授	中谷 敬高
同 免經商學部長	教授	加藤金次郎
任學生主事	教授	野村 次夫
同	教授	水谷 揆一
免學生主事	教授	木村 健助
同	教授	賀來 俊
任書記	教授	田中 佐雄
(除科教務課)		小笠原佐守
(庶務課)		青木純一郎
(會計課)		平田 惣治
(專門部教務課)		泉田 甚一
(學 報 課)		坂部 正武
(專門部教務課)		坂倉 柄音
休職期間満了ニツキ 講師職任	助教授	長岡 克曉
(專門部)		岡本 眞一
(專門部)		加古徹次郎
(專門部)		後藤新之助
(專門部)		土田 廣藏
(專門部)		黄 廷 富
(專門部)		今川 太郎
(專門部)		森 政造
(專門部)		八木 弘

昭和十五年三月卒業及豫科修了
成績優良並に佳良賞受領者

優異賞

- 室水 嘉一 (學部法科) 栗坂 諭 (學部法科)
- 下田 實郎 (學部法科)
- 綾部 幸夫 (學部經濟)
- 道家 保 (學部商科)
- 門谷 壽郎 (學部法科) 野瀬 一 (學部法科)
- 山本 市郎 (學部法科)
- 上代 晃 (學部英語)
- 本多 四郎 (第一豫科)

佳良賞

- 樺島 明 (學部法科) 辻井 寛 (學部法科)
- 木下 昌夫 (學部政治)
- 井上 瑞夫 (學部經濟)
- 林 隆之 (學部商科) 吉村 立朝 (學部經濟)
- 青木 文雄 (學部法科) 平野 茂 (學部商科)
- 井上 秀男 (第一商科) 合田 實夫 (第一商科)
- 中村 秀雄 (第二商科) 山根 大治 (第二商科)
- 横原 富雄 (第一國漢) 八木 敏 (第一國漢)
- 鈴木 繁造 (第二國漢)
- 穂積 芳男 (第三國漢) 大野 満 (第三國漢)
- 角谷 通夫 (第一英語) 中林 正雄 (第一英語)
- 荒堀 茂 (第二英語) 宮下 忠吉 (第二英語)
- 入田 順雄 (第一豫科)
- 野村 正徳 (第一豫科)

皆勤賞

- 野村 正徳 (第一豫科)

進級成績優等賞狀授領者

即特許生

専門部第一部

- (商二) 南 富雄 吉武喜久雄 黒川 康
- (法二) 山瀬 博
- (商二) 植田 秀男
- (商二) 濱野 昌平 松下 邦

専門部第二部

- (商二) 早水 幸一 濱田與四郎 内田 正
- (商二) 吉井増太郎
- (國二) 村内 英一 大塚順三郎 中牧 忠一
- (國二) 高橋 忠次 吉澤 義竹 田中 勝次
- (國二) 福田 正次 内藤 鏡界 宇野 正邦
- (英二) 原田 勝
- (英二) 原田 辰男 松村 健二 中村 寛三
- (經二) 端山 辰男 浮穴 國男
- (商二) 信木 松夫 岡田 清敏
- (商二) 田村 正
- (英二) 上野 兼夫 岡田 清敏

第一豫科特許生

- 第三學年 高梨 茂 西川 芳郎

第二豫科特許生

- 第二學年 平野喜八郎

校友會誌創刊

本誌二月號豫告の「校友會誌」は四月創刊の豫定であつたが、學年末並に學年始の行事多忙の爲め發行が遅れましたが、五月中には發行の豫定であります。

原稿はまだ間に合ひますから、所感、隨筆、詩、短歌、俳句など御寄稿下さい。

尚封筒には校友會誌原稿と御記載下さい。

昭和十五年四月 關西大學校友會

戰線通信

拜啓其後は御清陸の御事と存じます、御無沙汰勝ちに打過ぎまして海に申譯もありませんが兵馬倥傯たる戦地の故として御寛容の程お願ひ申上げます。

願へば小生南支に上陸以來既に九ヶ月の時日を經過致して居りますが、この間幾多の戦闘に参加して種々困難なる状態の許にありて克く其の任務を遂行する事が出来たのも實に師長諸君様の赤心溢る御指導と御後援の賜と感謝致して居る次第であります。

小生等が現在駐留致して居ります處は私達が敵前上陸の攻略戦を敢行した〇〇市より〇里離れた田舎町であります。最早や皇軍の占領地たる此の地方には新しき平和建設への力強い歩みが着々と進められて居ります。〇〇市は事變勃發前に勝るとも劣らぬであらう様の殷賑を極め、諸種の新しい文化施設は相次いで現はれ、小生等が時々出張して〇〇市に行く度にその實況を見聞し、あの攻略當時の荒廢たる戦跡の街を回想して實に感慨無量なるものを覚へるのであります。

又現在の駐留地たる田舎町附近も早くより治安維持の組織が確立して支那民衆の中にもう戦争の暗い影は見出し得ない様に宣撫も行き届き、長閑な田舎町が廣々とした田園に圍まれた中で平和の息吹きに酔つて居るわけでありませぬ。斯うした占領地風景に接して居りますと、ふと今自分が戦地であり乍ら戦争が何か遠いものゝ様にさへ思はれたりする時もありませぬが、然し我々は寸刻も油断なく警戒の日々を送りつゝあります敵の蠢動反攻は我警備地域のすぐ前方にて執拗に繰

校友

海拉爾支部創立

黃塵千丈卷き荒ぶシベリアの一角海拉爾在任の校友は三月三十一日をトし、割烹「蒸」に於て校友會海拉爾支部結成發會式を催せり。洵に意義あり、時恰もノムハン事件中止後半歳支那に新中央政府正に誕生す。和平反共の新政府成立が世紀の一大劃期なると共に母校校友會支部の大興安嶺進越は長き歴史關大の亦一大エポックメイキングと記するも敢て憚らぬものであらう。本夕驅せ參じ來るもの文字通り大陸の最前線に敢然と國策の指導者として活躍する鈴木事務官、青木局長、福村技士に山中副理事の四名である。何れも昨夏國境事件當時よりの強者ではあるが寸暇なき公務に東奔西走遂に今日迄此の機を得なかつた。然し校友一度會へば十年の知己に似て母校の想出、諸先生の噂、校友の消息、支部の活動、國境事件の追想、扱ては各自の體驗抱負等時と益の重なるに従ひ、美妓の侍るものも忘れ青年の意氣を示す。當地支部では肩苦しい司會の辭や役員選舉も無用だ。話せば解る此處に我々の日常が特徴付けられるのかも知れぬ。聽て夫々御自慢のもの、披露でに時を忘れ、ペーチカ火の衰ふ頃福村技士の發聲に和し「關西大學萬歳」を三唱、大いに關大精神の昂揚を誓ひ散會す。

歸路の氷上校友の高唱する學歌と校歌が隣の赤い國ロシアに流れて行くやうだ。ホロンバイルの高原で奇

しく抱り合つた學園の聲、實に力強き限りではある。近い將來、チタ、ウラルにも關大校友會支部が結成される事を信じて我々は常に御國の爲め、ソ聯外蒙と闘ふものである。

懐しい校友諸兄に當地を紹介する一畝(略)を呈し併せて先登支部の御隆盛を祈る。尙本支部會員にして當省下西新巴旗參事官として御活躍の先登大野氏が公務の都合上、田上軍法官殿は日本高文受験の爲め、御歸國中、又本春當地入營の江口君は新兵隊故外出不可等の理由に依り御出席なかつた事は残念であるが、それだけ次回の盛會を期する次第。此の他にも校友が此の別天地に活躍されて居ることと思ふ。

海拉爾支部會員(次第不同)

- 支部長 大野政一、幹事 青木太郎、幹事 福村爲臣
- 大野政一(昭二大法) 興安北省新巴旗 旗參事官
- 福村爲臣(昭六豫科) 海拉爾地方觀察台 技士
- 青木太郎(昭七大法、中) 海拉爾 放送局長
- 田上 實(昭十一大法) 第十軍管司令部 軍法中尉
- 鈴木 良(昭十專一法) 興安北省開拓廳產科
- 江口誠一(昭十四專二法) 海拉爾第一郵便所(軍事氣
- 付) 綠川部隊蜂谷隊
- 山中木太(昭十四專二法) 海拉爾都市金融會社 副理事
- 事務所 興安北省海拉爾中央大街
- 海拉爾都市金融合作社氣付 山中木大方

(電二三六番)

り返され毎夜銃聲を聞かぬ事とはなく、〇〇山上には我隊の厳しい生活の不便を忍んで日夜の別なく不休の警戒を續け、敵と睨み合ふて居る状態であります。之等の敵に對しては幾度も討伐中掃蕩を繰返し、敵に殲滅的打撃を與へた事も再三であります。敵は次々と兵力を補充しては小頼にも我に反撃を加へて來るのであります。最近の戦闘は附近の地理的な關係から何時も重疊戦々たる山岳地帯で行はれますので、敵の戦力は侮るべきものではないにしても行動に於て相當な困苦を耐へなければなりません、特に昨年末より行はれた大掃蕩戦は其の激烈さに於て小生等が南支上陸以來未曾有のものであり、壯烈な白兵戦を演じて敵が蟠居してゐた山頂の堅固な陣地を占領しました、實際一本の樹木もない突元とした岩石ばかりの峻嶒を頂上から敵陣の亂射を浴び乍ら進撃する時の困苦さは筆舌に盡し難いものがあります。

又本年一月末日には吾等が入道岩と呼稱してゐる山頂の大岩下に盛んに陣地を構築してゐる敵を攻撃しましたが、作戦見事に功を奏しまして我が隊は十數人の敵を捕虜にし、尙幾多の兵器を鹵獲をなしました。敵は多數の遺棄屍體を残し潰走殲滅的打撃を與へ、凱歌を擧げたこととあります。

事變も汪精衛の新政府成立近きと共に最後の段階へ進んだ感がありますが、しかし現在吾等が警備生活上から想像しましても、まだ本事業が東洋永遠の平和建設の礎として眞の成果を擧げて解決するまでは相當の時日を要するものと考へられ、吾等の責任も又重且つ大なるものを痛感致してゐる次第であります。この際吾等の最も必要とする所のは今一層堅忍

新京支部

三月例会の記

二月廿七日午後六時より大興ビル青葉グレルに於て第九回「國都」例会を開催する。

克山縣警察學校より新設滿洲開拓青少年義勇隊訓練本部に招聘されて本日着任の村上伊三雄君と、日瑞貿易京城支店より轉勤の重盛角治君の兩新人を迎へ珍蹟も加はり御神酒を注入した愉快な例会をやる事が出来た。

村上君は校友會齊々哈爾支部長、拜泉縣から克山縣へと討伐隊長として匪賊を追ひ廻した偉丈夫であり、滿洲焼けた赤ら顔に廿餘貫の巨體をゆすぶつて、多々益々辯じ、今夜は最初から村上デーの感がある。

何時もの研究發表を今日は村上君の討匪談に置き替へて御願ひする。聖戦は中南支の新戰場に向けられ慰問袋に銃後國民の熱誠注視の薄らぐを感ぜられる、滿洲國の守備に今猶泥濘をおかし草分けて鼠賊赤賊を追ひ廻る討伐隊の苦心を國民は不思議に思ふだらう。而し我々は其處に興亞の現聖戦が如何に尨大にして至難なるかを感ぜしめられるものである。

討伐隊の辛苦を、匪ダンをくぐり生死の境に奮戦した村上隊長の體験談はいたく感動させて止まなかつた閉會の十時迄新人珍蹟を中心とした例会は何時も乍ら和氣話々たる内に了することが出来た。

當日の出席者

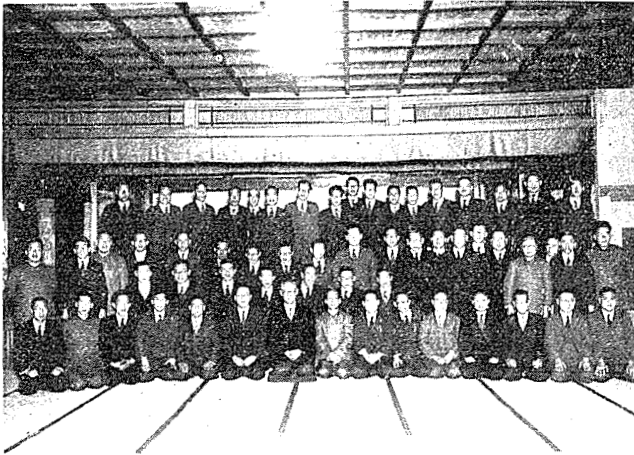
杉垣進吾、杉山弘、村上伊三雄、重盛角治、大北良之輔、喜多初次、志岐五六、川瀬年信、佐藤丈夫

大阪府市在勤

千里山同窓會

聖戦下に光輝ある紀元二千六百年を迎へ、愈々舉國一致東亞新秩序建設に邁進すべき秋に當り、官公署に職を奉ずる我々同窓生も是の際より一層親交を深め、益々總親和の實を擧げ、相協力して時艱克服に努力すべく去る三月十五日(金)午後六時より新世界「播重別館」に於て懇親會を開催した。

久方振りの會台とて定刻前より參會者多く、午後六



大阪府市在勤 千里山同窓會

持久困苦缺乏に耐え得る努力であらうと考へます。幸ひに小生は御蔭を以て出征以來至極壯健にて軍務に就いて居りますので、今度も益々奮勵努力して以て銃後皆々様の御期待に副ひ度いと常々念じてある次第でありますればどうか今後共何分の御指導御後援を切にお願ひ申上げます。先は右御無沙汰がはりに近況お知らせ致します。三月二十五日

南支〇〇部隊〇〇部隊大西隊

少尉 嶋 岩太郎 (専門部教習課)

……出征以來既に一星、箱中支の曠野に勇躍致して居りますから御放念下さい。……某地區より南方百數十里轉戦、目下〇〇地南岸の新戰場に進出、連日連夜鏖戦を敢行致して居ります。彼の冬期攻勢も皇軍の爆進により到る處戦勝を獲得、武勳赫々中支の原頭に皇威を發揚と共に我が郷土部隊の名聲を發揮した次第であります。今や戦跡の大小都市は勿論寒村に到る迄、治安維持會設立され東亞建設の黎明も遠からずと存じます。當地は日中内地の五月頃に相當するも朝夕は寒氣厳しく、去る一月廿一日、二月二日の兩日は降雪ありて中支の山河も白衣の戰場と化し、今月は當地方の雨期にて連日の如く降雨あり、泥土膝を没する悪路は殆んど車馬の交通不能の現況であります。昨秋は轉戦中、久保田先生にめぐり合ひ、胸中感無量、共に決意を示して東西に別れたる次第であります。今後共一層拍車をかけ奮闘努力致す覚悟であります。二月廿五日

中支〇〇部隊〇〇部隊〇〇隊吉田隊

海尉 吉田健六 (専門部教習課)

時より約四十分行、學長神戸博士の時局に關する我々の責務について御講演あり、午後七時より晚餐會に移る。恩師を囲んで種々懷舊談に時の過ぐるを忘れ、一同昔の學生氣分に還り、學歌を合唱して午後九時散會した。

- 出席者 神戸學長、喜崎明、教授、神屋數學部主任
 府側 織田佐次治、天宅俊治、大泉三郎、徳竹要
 中島平吉、上村靜馬、谷原九三藏、江里口
 正行、佐野登喜雄、前田愈、山田清太郎、
 尾崎米一、花島善吾、小島孝、今井憲夫、
 久松鹿治、二口貞信、筒井國義、大川三三
 山本清之助、竹谷眞實、兒玉市太郎、淺野
 敬次、瀧川芳男、田中巧、安川勝太郎、山
 内香處、橋本眞一、植村利治、渡邊忠男、
 生野義忠、實成清、山本嘉孝、中野由藏、
 平島廣、谷口義正、田口頼賢
 市側 増田博、大江照雄、松谷哲藏、大塚豊、古
 林賢順、林太郎、青野昌平、中辻淳、牧忠
 勝、吉田金之助、中村泰音、廣兼重邦、雨
 宮正男、百武通雄、吉岡賢五郎、長谷川稔
 押嶋寅雄、山根賢藏、伊達惟修、竹谷朝治
 曾子一、岩崎美貞、永井勝志、島田信一
 崎崎嘉澄

青 松 會

三月二十日、所は幾野の道の邊にあらぬ、松虫花壇に於て大正十二年出身者相集ひ一夕の歡を恣にした。互に十七年振りの久闊を謝し乍ら、和氣語々の中に花壇の旁圍意に包まれつゝ、互に汲み交はす顔と顔、酒

間を蝶の如く嬉々として飛び廻る乙女達、洪笑、亂舞學歌高唱、果ては讀かしの昔の思出談に花を咲かせ、津田君の昔ながらの人生觀演説、大隅君の鋭き人物月旦に亞いて角帽を順々に冠らせ拍手の雨を浴せる等一同肝膽相照らし意氣相投じ全く快々裡に會の幕を閉ぢた。

當日出席者 ○津田米太郎、大隅末廣、○山本順應
 藤波一治、江村至身、三宅通夫、○平野照彦、森
 田恒次郎 ○印は發起人
 因に次回幹事を左記諸氏に御願ひすることに決定して散會す。
 津田米太郎、平野照彦、三宅通夫、藤波一治。

會 員 消 息

池田 正男君(昭十四專一應)臺灣總督府奉職中の處、福
 山第四十聯隊松尾部隊福長部隊に入營
 今井 貫一氏(昭 師) 三月十八日逝去
 岩見 實君(昭十四專二應)應召、福岡歩兵第二十四聯
 隊第一中隊第二班在營
 遠藤 吉次君(昭七 專應) 大谷商會社石家莊支店長
 として赴任、支店所在地は北支京漢線石門市大經
 路二號(電四一番番)
 大加戸恒一君(昭七 大專) 三月九日北支天津陸軍病院
 にて陣沒、遺族は麻路市南神屋町六ノ一、大加戸
 寛一氏
 大橋 満君(昭九專三法) 警部補、船場署より經濟保
 安課へ轉任
 岡本 義信君(昭十二專四) 今春廣島文理科大學國文科

今般應召に際し熱烈なる御歡送を賜り難く御禮申上候以御陰昨十五日無事歩兵第七十聯隊に入隊仕候間他事乍ら御休心被下度候、當日早速某地に出張部隊長に御申告仕候處圖らずも榮ある第一線勤務の大命を拜受任り二三日中に某方面に單身赴任致すことと相成候之偏に皆様方の絶大なる御後援の賜と厚く感謝致居る次第に御座候現地到着の上は一死以て御奉公可仕候間爾今共何分の御教導賜度伏して御願申上候(後署)

少尉 川崎 榮太郎 (専門部教授課)

……私も相變らず元氣一杯にて南支の最前線にて警備の任についておますから御安心下さい。去る二月十一日は光輝ある紀元二千六百年の佳節にて、當日は遙かに皇居並に榎原神宮を拜し、それから部隊の演藝大會が開催されました。その前日は大阪市派遣のキングレコード歌手松島詩子、浪曲の京山雪州一派の郷土部隊慰問演藝團が來隊され、又過日は大阪今里新地の藝妓の演藝班が來隊されるとか、銃後皆様方の無限の御後援に只々感謝感激致して居ります、後略、三月八日
 南支○○部隊書函○號本部
 原 豐 (専三法一在營)

意外の御無沙汰を致しました、只今○○地の第一線に御奉公致して居ります。大學の方も今は随分御多忙と存じます、中支も大分暖くなって來ました、つい最近まで雪と雨で全く泥濘でしたが、いろ／＼で難い人生の體驗を味つておます。三月十一日
 中支○○部隊の○部隊
 平井 幸道 (昭八大專)

を卒業し、姫路市立鷺城中學教諭奉職

木下 昌夫君(昭十五、專三法) 満洲國鞍山、昭和製鋼所に
人社人事課に勤務

鞍貫 宣君(大六、專法) 昭和十五年三月二十日逝去

遺族、住吉區天下茶屋橋通一ノ一三

栗原悦治郎君(昭九專二法) 臺北州知事官房會計課より

同内務部經濟統制課に轉勤

近藤助太郎君(昭六、專法) 警部補に任じ工場課より十

三橋署へ轉勤

合田 恵夫君(昭三、專法) 警部補、警務課より經濟保

安課へ

坂口 軍司君(大十三專法) 片桐と改姓、大同醫務酸素

會社取締役、大同製線會社支配人をつとむ。自宅

は此花區朝日橋通二ノ七、電七佐堀一六八、三

五五二番

佐藤北次郎氏(高、講、師) 東北帝大名譽教授、三月十

六日逝去

白木 眞一君(昭十二專四) 都島第四小學校より大阪市

立第六工業學校教諭轉任

輿見常三郎君(昭十五專一商) 朝鮮金融組合理事見習と

して全羅南道松汀邑松汀里松汀金融組合に勤務

鈴木 正夫君(昭九、大經) 應召中の處先般歸還し、早

川金屬工業會社無線部營業課に勤務、住所は住吉

區山阪町ノ五六

鈴木 義衛君(昭十六法) 朝鮮慶北高州法院支廳判事

を退職、長野縣上伊那郡赤穂村久保に閑居さる

菅原 龍雄君(昭十五二法) 警部補、守口署より田邊署

へ轉勤

竹崎 米吉君(大六、專法) 岸和田市長を辭し、興亞院

囑託として來る四月二十四、五日ごろ華北連絡に
赴任さる。

谷口新太郎君(昭八大法) 警部補、中本署より特別高

等警察課へ轉勤

津村 信次君(昭五、專法) 村尾と改姓

中村八十一君(大八、專法) 臺灣總督府法務課長より今

般新設の法務局長に轉任さる。住所臺北市千歲町

二ノ三七

中村 寛一君(昭十專二法) 警部補、經濟保安課より警

務課へ

早川 諍馬君(昭四、專法) 新京特別市五色街、鑛發社

宅一五二號に轉居

藤本 武一君(昭五、大法) 警部補、戎署より島之内署

細谷 正士君(昭十一專一商) 北滿警備より歸還、高松市

西濱町五六

松本市太郎君(昭二、專經) 警部補に任じ外事課より阿

部野署へ轉勤

丸野 智君(昭九、大法) 警部補に任じ川口警察署勤

丸山 昇造君(昭十三專二法) 昭和十三年十二月應召、南

支○戦線に活躍中の處昨年十二月二十日未明○

攻略の決死隊に加はり壯烈なる戦死を遂げられた

る旨母堂より通報に接す。遺族島根縣安濃郡大田

築町、母丸山時子氏

森田高太郎君(昭十、大法) 鹿兒島本線串木野驛前に移

轉

森山 輝君(昭十專二法) 警部補、交通課より警務課

へ

矢野 芳雄君(昭十三大法) 警部補に任じ、特別隊より

天王寺署へ轉勤

前略 渡支以來既に二年に垂んと致して居りますが

益々元氣旺盛只嘗御奉公の道に勵んで居ります、陣中

にて學報を拜見學友の奮闘、母校の躍進を偲び一人懐

しさを覚えます。當地も今や春翻、杏子、梨の花咲き

亂れ、楊柳又若芽をふき出し。麥もすく／＼と伸びて

居ります、數日來新政權成立祝賀にて町、名ばかりの小

町中大賑ひです。かくて春の若芽のやうに新政權も健

やかに伸びることを期待して居ります。四月三日

北支○○部隊堀部隊本部

藤井隆司(昭十三專一商)

只今學報が着きました、ありがたう。戦地に居て便

りを取り取る時、まして母校の報を得る時は山間の寂

しい處に居るだけに賑やかな大阪の事どもが懐かしく

思ひ出されます。當隊は目下討伐中にて小生も元氣に

働いてゐます、その中に快ニュースを得ましたらお知

らせ致します。

北支○○部隊○○部隊生田部隊本部

福島正恒(昭十三專一商)

前略 南支は目下特有の雨期に入り、連日の雨、緑

したる熱帯樹の上、蕭條として降りそゞぐ細雨、一

入の風情有た、此處○○海の孤島、岩壁に打寄せる波

の音にほのかに淡い郷愁を覺えつゝ遙かに校友諸兄の

上に想ひを馳せて居ます。後略、二月二十三日

南支○○部隊○○部隊家城隊

渡邊一男(昭十三在學)

學生彙報

基督教青年會 (千里山)

光輝ある紀元二千六百年の新學年に我青年會の報告をなす事は感謝である。

今や愛する祖國は幾多の困難と闘ひつゝ、新しき東亞建設の使命に邁進しつゝある。この歴史的轉換期にあつて我等若き基督者の務めは徒らに呼号するにもあらず、空しく孤高獨善を誇るにもあらず先づ自らの信仰生活の充實に務め身邊に神の榮光を顯はしつゝ而も時代の魄を望んで我等に迫り給ふ神意の成就に獻身しなければならぬ。

而して後我々は傳道に對する神の御援助を得るのである。

本年度は大阪學生基督教青年會聯盟に於ては傳道をその第一的とし着々準備してゐる次第である。先づ第一にパンフレットの刊行である。これは諸先生方及び學生の筆になるものであり五月上旬には學友諸兄にお頼ちし得ると思ふ。第二は五月上旬各學校に於て講演會を開く豫定にて本學の講師は元京大教授山本一清博士の筈である。そして第一學期の傳道の中心は五月二十二日に同盟總主事を迎へての大集會であり、これは各校聯合の

ものである。(場所未定)

各集會共學友諸兄の奮つて御參加下さらん事を御願ひします。特に新入生諸兄の參加を希望します。尙詳細は追つて發表。新入生諸兄の御入會を祈ります。

青年會につき御照會は左記へ願ひます

住吉區北島東一丁目二

法三 本田浩幸

天下茶屋四九四

山岳部 (專門部一部)

我が山岳部は創立以來日未だ淺くとは云へ熱烈なる我が先輩諸兄の涙ぐまじき奮闘と幾多の困難に戦ひ鍛へられて、年々目まぐるしき向上をなしつゝある事は私等山岳部員の最も誇となし、喜びとする所である。

我が山岳部の歴史は先輩諸兄の血と汗の結晶とも云ふべきである。この尊き跡を引きつぎて犠牲的團體精神をもつて固き結束をなしつゝ進み行く部員の堅實なる姿必ずや、我が山岳部の將來こそ、刮目して餘りあらう。

云ふ迄もなくこの未曾有の國家大非常時の際我等青年の體位向上を近來一層喧傳される時局下に對し我が山岳部の使命

や重大大である。

然るに我が山岳部を未だ充分に認識されてゐない學友諸兄の多き事は非常に遺憾である。

茲に昭和拾五年度新學期を迎ふるに當り我が山岳部の目的、内容行事を發表して親愛なる諸兄の參考に供し度い。

今後私等部員は益々一致協力他の大學高專山岳部と伍して何等遜色なき様大いに努力發展してこの紀元二千六百年の輝やかしき御代に大いなる足跡を残したい覺悟である。

一、山岳部の目的

本山岳部は山岳を跋渉して心身を錬磨し部員相互の親睦と、團體的精神の養成に務め、併せて關西大學建學の理想に基づき剛健たる精神、體位の向上を計るを以つて目的とす。

二、昭和拾五年度山岳部幹事

主 將 小島 猛

マネージャー 井手 豊彦

會計 村上 泰三

リーダー補 川端 岬

三、昭和拾五年度山岳部プラン

(主行事のみ)

1 伊吹山登山 (五月)

2 第一班 道場ベースキャンパ (六月)

第二班 大釜山縦走 (〃)

(下市―川合―彌山―行者還―國見―大善賢―山上ヶ嶽―吉野口)

3 夏山登山 (七月)

第一班 北アルプス縦走

(大町―鳥帽子―槍―奥穂高―前穂高―上高地―燒岳―上高地―德澤―大瀧山)

第二班 後立山縦走

(大町―鉢の木―鹿島槍―唐松岳―白馬四谷)

第三班 上高地、洞澤キャンパス

活

4 大壺ヶ原キャンパ (十月)

5 比良山縦走 (十一月)

6 神鍋山及鉢伏山に於てスキー合宿 (十二月、一月) 以上

千里山馬術部

三月三日 第一回西日本騎乘大會が京阪沿線寝屋川にて舉行され、優秀自馬所有校たる本學も卒業前の廣谷前主將統率の下に宮崎、柿原、廣瀬、宮地、佐々木の各豫科新人軍を以て之に参加、學生馬術の妙技を揮ひ絶讃を博す。

昭和十五年度千里山馬術部新役員、及卒業生就職先左の通り。

主 將 安藤 六雄(經二)

副 將 齋藤 幸昌(商二)

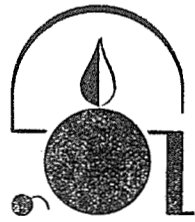
マネージャー 岡村 正次(商二)

副マネージャー 加藤 保英(商三)

卒業生 廣谷 泰助(宇治川電氣)

藻井 泰忠(自家業)

黒田 芳松 以上



春はスポーツ醫學から

醫學博士 江里口春志

「醫は仁術」と云ふが何にも病人を癒すばかりが人の道でない。研究室の一室に閉ぢこもつて蛙の睾丸と眺めつこしたりモルモットを何百匹殺したりするのも甚だ味氣ないと云ふので若くして明朗なる醫者が研究の對象をスポーツマンに求めた。拳闘選手の肘關節は異常に發達し、短距離走者はベテヤ足が多く、ランニングの初める前と走つた後との脈搏呼吸、血壓の差異如何、スポーツマンの心臓は普通と、どう違ふかと云つた様な生理解剖的な研究から初まつたが、最近では好記録を作る爲の練習分量、女子選手の爲の月經調節法、疲れを癒すための藥等スポーツ人に切實の問題が研究されて來て居る。スポーツ醫學の發達は變てオリムピックの覇者となるであらう。人體の生活現象はこれを靜と動との両面から觀察する事が出来る。筋肉勞作を伴はぬ生活現象の觀察は靜であり、筋肉勞作を伴へるものは動の觀察である。臨床醫學の觀る處は主に靜の觀察であつて患者の安靜狀態を主眼として研究せられて來た。反之體育運動や勞働の醫學の觀照の常に動であつて筋肉勞作は如何なる身體現象の伴ふや、個人の勞作力と身體との關係如何等がスポーツ醫學の主體である。スポーツは之を適度に行へば健康を増進し作業力を高めるが度を失すると疲勞を招き健康を害ひ遂には勞作に堪へざるに至る。鍛鍊の如きは適當に行

ふ時は體力と共に其記録を増進するが、餘りに過敏な鍛鍊は却つて記録が伸びぬのみならず、疲勞狀態に陥り遂には身體の障礙を残して「スポーツ」を廢するの止むなきに至る。「スポーツメン」でも競走に得意なもの、力技に強いもの各々得意があつて必ずしも兩者を兼ね得ないのは個人の體質によつて適不適が定められるからである。さて人間の生命を永遠に保存するに缺ぐべからざる飲食や生殖の本能と雖もこれを本能の越くまゝに放任しては、多くの場合却て生命に有害となると同様運動本能においてもその力の弱い者には運動を奨励しその本能の強盛な者には、適當な制限を要する。運動に興味多い場合には珍味佳肴を飽食し易いと同様動もすれば度を超して過度修練に陥る處があるから、特に合理的な制限を要するのである。又運動選手自らは運動衛生がスポーツマン精神の重要な部分であることに留意して身體を擁護し體力を高めこれが活用を完全ならしめ以て眞にスポーツの精神を發揚するやう力めなければならぬ。しかし運動選手となる位の體力を有して居る者は常人より遙かに優れた體質（體力）を天より享けてゐるのであるから彼等を常人と同程度に考へて常人と同様の制限を設け、又常人に過度の練習であるからと云つて彼等にも過度であると考へることの誤つてゐることは勿論である。さればとて人

の生活狀態は屢々健康破壞の危機に臨みますことがあるから彼等を餘り超人的に考へるのは危い。況や選手は自己の屬する團體の名譽のため屢々犠牲的の心身緊張と身體的努力とを強ひられるにおいておやである。大正十四年七月文部省で發表した、全國師範學校運動選手二千六百十六名の卒業後、五箇年間に於ける死亡率は非選手の死亡率に比してうんと高率を示して居り、しかも選手の結核死亡率の甚だ高きが如き事實に思ひを致せば將來運動衛生に關して、一層注意すべきことを思はしめるのである。以上述べたところにより將來運動選手をして一層國家に貢獻せしめるためには左に掲げる衛生に留意することが肝要である即ち（イ）過度修練を避けて常に注意して疲勞の回復に務め、飲食に關すること榮養の保持に務め（ロ）強い運動は十分ウォーミングアップの後に於ては、運動後は急に休息することなく適當な整理運動を行ふこと、體力測定又は體力検査を受け自己の體力の位置に關し、明確な智識を有しこれを練習に適用すること（ハ）選手となつて相當練習をなすことを豫期する場合には、豫め醫師の健康診斷を受け、その後と雖も時々醫師の診斷を受け又は自ら身體の健康狀態に深い運動生活から、急に安靜的な生活に移ることは屢々身體諸器官の機能に變調を來さしめ延いて種々な疾病の發する機會を作ることとなるから、生活の急變を起さぬやう留意すること、（ニ）身體に違和の感あり、又疾病に罹つた時は適當な指導者の忠言を求め必要に應じ醫師の診察を求め適切なる處置を講じ所謂無理をしないやうにすること、スポーツ醫學は次から次と述べ度いと思ふ、又航空醫學等に就ても次に書いて見る心算である。

—筆者は昭和九年學部法科出身・梅田・阪急東大に於て泌尿科病院開業—

校友會員名簿について

昭和十四年度校友會員名簿は目下校正中にて一部校正を了しましたから、近日中に發行の運びに立至るべく、暫らくお待ちのほどお願い致します。

尚本年御申込みの方は本年未發行の名簿よりお送り致しますから、その點御含みおき下さい。

昭和十五年四月

關西大學校友會

校友會費拂込者氏名 (其の一)

一時拂(五拾圓)

澤田 康治
昭和十五年、六、七年度會費
廣巳 經世

昭和十五年年度會費
濱本 玉雄 岸本龍太郎 岸上 正次 山内 弘吉
中川 文平 蛭谷 晃造 栗坂 諭 橋本 種治
平野 茂 吉松 寛彦 荒木 義信 米田 兼光
吉村 立朝 池上 猛夫 菅原 一夫 足立 豊治
田中 友治 藻井 泰忠 菅原 一夫 足立 豊治
德永 憲一 齋藤 達彌 有井 正次 井谷 忠承
井上 靖夫 齋藤 達彌 有井 正次 井谷 忠承
村島靖一郎 白井 種雄 池永 正次 井谷 忠承
岩木 公夫 齋藤 達彌 池永 正次 井谷 忠承
上村 正利 森田 憲一 大浦 和彦 岡本 道也
丸田 正永 尾崎 正三 立石 寛昌 岡本 道也
富永 重紀 富田 治郎 江崎 基 西村 鐵夫
小川幸志雄 井上 政一 藤野米五郎 中尾 眞一
塚本榮佐久 黒石 直衛 上野 榮次 久保 龍雄

上田 利夫 見市 正 木村 義亮 隅田 界
黄 東 鐵 豊田 一夫 大江 宇一 谷田 義雄
村木 實 久保 理平 玉城 安吉 林 隆之
多田 時造 石坪 貞雄 前田 勘治 鈴木 正夫
市川 勝 田邊 壽次 藤本 惠彦 李 鶴 俊
意島 太郎 上野 義雄 黒田 由松 小林 俊雄
牧村 輝雄 相生 智男 黒田 由松 小林 俊雄
張 季 興 荒川 麟一郎 鈴木 猛 千田 茂治
藤井 謙三郎 山中 光雄 安福 文雄 山口 政次郎
金子 勇美 廣石 泰助 里井 威 坂田 種明
大峯 正雄 松本 一郎 小前 典夫 水津 景太郎
兵三 新三郎 山下 正英 富田 金作 坂口 昇
金 長 松 高橋 勝太郎 樺島 明 辻 典治
千馬 馨 鈴木 良 木下 林三郎 有長 孝一
小松原 茂樹 井上 秀男 赤尾 正義 中村 秀雄
樋口 武 田邊 啓文 八木 景 勝田 嘉彦
高木 仁良 清水 清 芝田 和半 村澤 久志 勲 太
安藤 卓也 鳥取 久治郎 橋本 順行 栗山 徹
三上 卓也 戸田 正視 生田 讓三 平井 源太郎
三島 幸 坂本 一郎 岡部 三郎 飯高 一男
村上 政雄 高藤 隆郎 石川 昇 田所 能一
北川 樹雄 高藤 隆郎 石川 昇 田所 能一
竹内 義貞 村瀬 眞勝 野尻 義正 植山 義治
柏原 壽吉 仙波 秀雄 河野 治雄 加藤 大一
水田 安次郎 寺元 正義 谷水 太郎 宮地 潔
佃 善三郎 高橋 比佐也 荒川 正明 藤澤 武雄
海藻 正久 松本 小三郎 藤澤 武雄 光田 健次郎
島田 浩二 黒田 健太郎 清水 治夫 齋藤 作典
平尾 博 伊藤 龍美 小野 盛義 北島 一郎 大迫 秀男
高井 才二 石川 之久 阪野 善造 大多 尾 算夫
山本 定三 井村 宗次 六村 卯三郎 北川 滋
若田 大平 黒田 美男 上 眞五 耕 斗 二
千田 陽一 永澤 勝一 古木 健夫 伊吹 主巳
依田 孝 酒井 政之 才ノ木 雄次 鈴木 繁造
新谷 秀夫 山南 好章 葛井 崇三 池田 保美

大正十一年六月十五日創刊
昭和十五年四月十日印刷
昭和十五年四月十五日發行

編輯人 神屋敷民藏
發行所 關西大學學報局
印刷所 谷口印刷所

天六學舎 大阪市東淀川區長柄中道
千上山學舎 大阪市外千上山

本館電話 四三〇三
支店電話 四三〇三
電話吹田 四六一三

以下次號



高等・専門・大學生諸士の書店としての

當販賣部東店は、常に店内の充實をはかり、あらゆる専門書を取揃へ、皆様の御来店をお待ちしてゐます
 何卒書籍に關する御用は弊堂を御利用下さいませ

●主要販賣圖書

法律・經濟
 商業・工業
 機械・産業
 宗教・哲學
 文學・社會

部賣販橋齋心堂々駿

市電一橋下北三軒目東西兩店
 電話一場一〇七〇番・四五〇七番

大阪市南區東清水町二九 駿々堂出版部 電話一四一五・二〇八七番